

補陀落山の巡礼路

——浙江省普陀山における17世紀前半の功德碑をめぐって——

石 野 一 晴

Making the path in the Chinese Potalaka:

Introduction to 17th Century's two inscriptions of donations for the Putuoshan

ISHINO Kazuharu

This paper examines two stone monuments bearing inscriptions that exist on the island of Putuoshan, China. The stone inscriptions are lists of the names of those who made donations for the construction of the pilgrimage route leading the way to the mountain pilgrimage site of Putuoshan in the early 17th century. This study revealed that a large amount of money was donated by a large number of Buddhist monks and laypeople living in Ningbo, Hangzhou, Huizhou and other areas; that the financial strength of eunuchs also significantly contributed to construction of the pilgrimage route, and that donors also included many women.

キーワード：普陀山、寄進、碑刻、17世紀

はじめに

東アジアの海上交通の要であった舟山列島。この島々の東方に位置するのが普陀山という観音の聖地であった。古くからこの地は日本や朝鮮半島から海路寧波を目指す船がはじめにたどり着く場所であり、東アジア海域で極めて活発な交易が行われていた17世紀初頭には、万暦帝の命により勅建の寺院が建てられ、さらなる巡礼者を集めた¹⁾。まさに普陀山の黄金時代と言っても良い。

しかしながら、17世紀前半における普陀山の記録はあまり残っていない。万暦年間に『重修普陀山志』が編纂されてから、康熙年間半ばに新たな山志が編纂されるまでの間には多くの人々がこの地を訪れたことは間違いないが、一部の文集に旅行記が残っているだけであり、当時の普陀山の状況については推測に頼らざるを得ない部分が多かった。

1) その経緯については拙稿「明代万暦年間における普陀山の復興」(『東洋史研究』64-1, 2005年)を参照されたい。

おそらく当時の記録は少なくなかったはずだが、南明政権がこの地域に成立したことや、康熙初年の西洋人による略奪行為²⁾ などのため、多くの文献・文物が失われ、辛うじて残ったものも文化大革命の嵐の中でその多くが破棄されてしまった。これらの失われつつある史料を丹念に集め、活字に起こしたものと王連勝氏を中心に編纂された『普陀洛迦山誌』がある³⁾。王氏は長年の研究の中で数多くの碑刻を収集され、その一部には現在ではすでに見ることができなくなっているものも含まれる。その意味で、極めて大きな業績であると言って良い。しかしながら、収集された碑刻資料のなかには、読みにくい文字が省略されたり、あるいは文章部分だけを収録して、碑刻の撰者等の情報を割愛していたりすることがまま見られる。もちろんその多くは、些細な情報に過ぎないのであるが、一部には、当時の普陀山の様子を鮮やかに甦らせることのできる興味深い記録も残されている。

筆者は2007年5月に行った現地調査において2通の碑刻が並んで壁に埋め込まれているのを目にした。両者ともに普陀山で最大の寺院である普濟寺の門前の壁にはめ込まれる。このふたつの碑刻はともに普陀山の巡礼路整備にかかわるもので、ひとつは普陀山の僧侶たちを中心とする寄進の一覧であり（「妙莊嚴路功德碑(1)」, 以下碑刻(1)）、もう一つは俗人を中心とする寄進の一覧であった（「妙莊嚴路功德碑(2)」, 以下碑刻(2)）。両者ともすでに摩滅が進んでおり、特に後者に関しては間近にみてもはじめてそこに文字が刻されていることに気づくほどであった。これらの碑刻には文章が全く書かれていないこともあり歴代の山志には全く収録されていない。『普陀洛迦山誌』にはこの2つの碑刻が存在することが紹介されているが、前者については一部の文字だけが掲載され、後者に至っては、文字がほとんど見えないとして、比較的判読しやすい題名と年代を記すのみにとどめている⁴⁾。しかし、筆者が現地で見たとこ、光の向きが良ければはっきりと弁別することのできる文字も多く、時間をかけて見ていけば、おおよその文字は読み取ることが可能であった。そのため、筆者は現地にて筆写を行うことにした。次頁に提示する碑文の復元図は拙いフィールドノートを活字に起こしたものであり、あるいは読み取りや筆写の誤りなどが含まれているかもしれないが、おおよその状況は明らかになるはずである。

一見すると人名の羅列に過ぎない碑刻から何が見えるのか。この事業に当たってどのような人びとが奔走し、資金を捻出したのかをさぐることによって、17世紀前半の普陀山をめぐる状況について概観してみたい。まずは該当の碑文を提示しよう。

2) 『南海普陀山志』巻4。

3) 王連勝主編『普陀洛迦山誌』（上海古籍出版社、1999年）。

4) 王連勝主編『普陀洛迦山誌』（上海古籍出版社、1999年）、pp. 547-548。

一・本碑刻の概要

碑刻(1)は右側に立てられており、僧侶の名前が列挙されている。この碑刻は『普陀洛迦山誌』には「妙莊嚴路功德碑」として収録されている。高さ1m76cm、幅は93cm。摩滅して見えなくなっている部分はあるものの、碑刻(2)と比べれば保存状況はかなり良好で、判読困難な文字はほとんどない。碑刻の一番右側には「普陀山普陀寺比丘及諸静主助資整路芳名開列于左」と記載されている。ここから道に石畳を敷く費用を援助した普陀寺の僧侶と各庵堂の僧侶たちの名前であることがわかる。普陀寺とは普陀禪寺、今の普濟寺のことである。この寺はもともと宝陀禪寺と呼ばれ、万暦年間に復興された際に「勅建護国永寿普陀禪寺」の額を賜っていた⁵⁾。なお、普陀寺と並び称される寺院である鎮海禪寺の僧侶の名前はここに書かれていない。この碑刻には僧侶の所属した寺院・庵堂の名称、僧侶の名前、寄進量（1～35丈）が記載される。一番左にはやや大きめの文字で「崇禎肆年歲在辛未仲秋」の文字が書かれ、崇禎4年（1631）8月に立てられたことがわかる。

主に俗人の寄進である碑刻(2)は高さ2m30cm、幅1mであり、全部で7段にわけて寄進者の名前、出身地、寄進量を列挙している。各段の高さは微妙に異なるが、おおよそ25cm弱であった。冒頭に「檀越寧官等各省善男信女助資整路芳名開列于左」、つまり「寧波の官をはじめとする各省の善男信女が資金を援助して道を舗装したその芳名を左に書き記す」と書かれている。全体の左下には「崇■壬■」という文字が刻されているが、おそらくは崇禎壬申（崇禎5年）のことであろう。碑額はなく、碑の上部には右から左へ「莊嚴■千」と右から左に文字が刻まれる。人名部分の文字の大きさは1.2cmほどと小さく、遠くからはほとんど判別できない。

下半分は摩滅が激しいため、全体で何名の人物が寄進したかは確定できない。あるいは碑石の左下には刻工の名前なども書かれていたのかもしれない。題名の順番は、基本的に寄進量が基準となっている。寄進量が全く同じ場合、官の高下、年齢、寄進した時期などの要素が関わっているのかもしれないが、個人の履歴が分かるものが極めて少なかったため、明らかにはできなかった。なお、壁に埋め込まれているため確認こそできなかったが、(1)(2)ともに碑陰はおそらく無い。

さて、おそらくこの2つの碑刻を見たときに誰もが気になるのは寄進額が「両」などの金銭を表す単位ではなく、「丈」という長さを表す単位で記されていることではないだろうか。1丈が果たしてどれだけの金額に相当するのか、この碑刻からだけでは理解することはできない。ただ当時の相場で考えると、地域や規模によって違いはあるものの、一般の寺院建築で簡単な修復だけなら100両程度、重修なら500両以上、勅建の寺院などは数千両単位の出費であった。この両碑刻で確認できる丈数は合計で800丈あまり、寄進の件数は360件ほどである。石材の価格は分からないが、数キロにわたって石を敷き詰めるとなれば、小さな寺廟の修復よりも額は大きいに違いない。仮に総額800両とすれば1丈あたり1両となる。1両という額は、庶民が簡単に出来る額でもない。穀物が1石あれば、家族を1ヶ月養うことができたが、崇禎初年の米の価格は1石あたり8銭から1両であった。普陀山のパッケージツアーの料金は寧波

5) 『重修普陀山志』巻2「建置」。

から普陀山までの往復の船代と食事を含めて1銭であった⁶⁾。大蔵経などを刊刻するための寄進は2銭前後が多かったようである⁷⁾。仮に1丈が1銭であったとすると工事にかかった総額は80両、ここまで安く済んだとは俄に信じがたい。

1丈がどれだけの額になるのかイメージするうえで、参考になる碑刻が2つ存在する。ひとつは清末の咸豊年間に北京の郊外にある妙峰山に立てられた碑刻である。ここには475丈の長さの巡礼路を整備する際に、石材に1664吊の金額がかかったと記される⁸⁾。つまり1丈あたり4吊(=4両)弱の金額がかかったことになる。当時の穀物価格は1石あたり2~3両であったことを考えると、崇禎初年の物価にすると1~2両程度と言うことができよう。

もうひとつは南宋の寧波における寄進碑である⁹⁾。ここには10貫文を寄進して1丈の参道をつくる資金にあてる、とある。10貫文は北宋であれば兵卒が1~2ヶ月生活できる額であった¹⁰⁾。物価は南宋になってさらに上昇していたとはいえ、相当な額であったのは間違いない。以上の史料から推測できるのは、1丈とは大人1名が余裕を持って生活できる程度のまとまった金額であったということである¹¹⁾。

以上のことを念頭に置きつつ、次章ではこの巡礼路がどのような経緯で整備されるに至ったのか山志などの関連資料から明らかにしてゆこう。

二・立碑の背景

上述のように、本碑刻が立てられたのは崇禎4年と崇禎5年である。この時期の普陀山には普陀寺と鎮海寺という2つの大寺院が完成し、周辺の海域の情勢も比較的安定していたことから数多くの僧俗がこの地にやってくる。特に観音の誕生日とされた旧暦2月19日の前後には、膨大な数の信徒が船に乗ってこの地を訪れ、観音に祈りを捧げるために本堂を埋め尽くした¹²⁾。多いときには一度の食事で24石もの穀物が消費されるほどであった¹³⁾。巡礼者たちは埠頭にたどり着いてから寺まで一山越えることになる。その距離は2キロ程度で、短い距離だが、旧暦2月~6月の巡礼が盛んな時期には雨も多く、天啓年間までは大雨に見舞われた参詣者たちは、ぬかるむ山道に難渋していた。

6) 拙稿「明代万暦年間における普陀山の復興」(『東洋史研究』64-1, 2005年), pp. 22-23。

7) 野沢佳美『明代大蔵経史の研究:南蔵の歴史学的基礎研究』(汲古書院, 1998年)。『天目中峰広録』の巻末にも寄進者の一覧と金額が記されているが、多いもので10両、もっとも少ないもので8分であった。

8) 東嶽廟北京民俗博物館編『北京東嶽廟與北京泰山信仰碑刻輯録』(中国書店, 2004年), pp. 293-294。

9) この碑刻は寄進者が日本に居住する華人であったことから顧文璧「寧波現存日本国太宰府博多津華僑刻石之研究」『文物』(1985年第7期)にて紹介されてから、多くの研究が行われてきた。近年でも王勇「寧波に現存する博多在住宋人の石碑」『中国の日本研究』第3号などがある。

10) 衣川強「官僚と俸給——宋代の俸給について續考——」(『東方学報』42, 1971年) pp. 177-208。

11) なお、善書のひとつである『自知録』には「道路の險阻泥淖を平治すれば百銭につき一善」とされる(雲棲株宏『自知録』巻上「仁慈類」)。

12) 張岱『琅嬛文集』巻2「海志」。

13) 『南海普陀山志』巻10「事略」。

巡礼路の入り口には白衣観音を祀った白華庵という庵堂があった¹⁴⁾。普陀山には数多くの庵堂が島中に建てられ、その中で多くの僧侶が修行に励んでいたが、白華庵は、もっとも人通りの多い場所に建てられていたこともあり、普陀山にやってきた士大夫の多くがここに泊まった。このため残された記録も多い。康熙年間に編纂された『南海普陀山志』にはかつての白華庵が美しい建物で木々に囲まれたすばらしい場所であったことを述べるとともに、庵の中に書籍や骨董がもっとも豊富に蓄えられていたと紹介し、その多くが清初の戦乱によって失われたことを嘆いている¹⁵⁾。

白華庵はこのように、多くの文人たちが集う場所であった。そのため、歴代の庵主は高名な僧侶であることが多く、多くの士大夫と詩文の応酬などを楽しんだのであった。普陀山の高僧の弟子たちが、師の手紙と普陀山で産出される良質の茶葉を手土産に、著名な士大夫の許を訪れることも珍しくなかった。例えば、嘉興の李日華のもとにも多くの文人や商人が入り出していたが、万暦37年7月22日に量虚という普陀山の僧侶が普陀山の茶を一包み持ってきたことが記されている¹⁶⁾。そして徐如翰の『檀燕山藏稿』にも、彼が病に苦しんでいる際に白華庵の庵主である昱光の弟子が師の手紙と普陀山の茶を携えてやってきたことに対する喜びが記される¹⁷⁾。乾隆年間にも、蘇州の僧侶が毎年三月になると普陀山に行つて観音大士に礼拝する際に茶を持って帰ってきていた¹⁸⁾。普陀山の中でもこのような茶を介した対話が盛んに行われていた¹⁹⁾。茶を入れるために湯を沸かした際の煙が庵から立ち上るのは、絶景の一つとしてしばしば歌に詠まれている²⁰⁾。これらはいわば、僧侶による営業活動とも言えた。仏道を語り合う友を得ることが叢林の経済基盤の安定につながる。陳繼儒もささやかなお布施が、山中に籠もって修行するものにとっては、僅かながらも助けとなることを述べる²¹⁾。この時期において北京ならばいざ知らず、はるか遠く離れた普陀山には宮廷からの直接的な援助はなかった²²⁾。明末の普陀山はあらゆる人々の空腹を満たせるほどの寺田は有していない。数千人の僧侶を養うには、個人による経済的な援助が欠かせないのであった。

白華庵の昱光は万暦年間に普陀山の復興を巡って北京まで直談判をしに行ったこともあり、官界にも広くその名を知られ、屠隆・董其昌・陳繼儒・徐如翰・張煌言といった名だたる士大夫たちが彼ら庵主に対する詩文を残している²³⁾。おそらく、宮廷の宦官たちとも広範な交流があったに違いない²⁴⁾。

この時期に白華庵の庵主であったのが昱光の弟子に当たる朗徹であった。彼は若くしてその才能を認

14) 『重修普陀山志』巻2「白華庵」。

15) 『南海普陀山志』巻8。

16) 李日華『味水軒日記』巻1。

17) 徐如翰『檀燕山藏稿』巻13「苦熱臥病偶補陀煜光上人高足持其師書至兼有山茗之惠賦此奇謝」。

18) 鄒炳泰『午風堂集』巻1「秋晚寓居滄波亭有作」。

19) 『南屏淨慈寺志』巻9に「化主」という職がこのような接待を担当している。叢林にとっても重要な事柄であった。

20) 『重修普陀山志』巻5には屠隆の「補陀十二景」の一つとして「静室茶煙」がある。

21) 『南海普陀山志』巻11、陳繼儒「普陀朗徹禪師修妙莊嚴路記」。

22) 釋海觀『林樾集』巻下「募化散衆齋糧文疏」。

23) 『重修普陀山志』巻6には昱光や朗徹に贈られた詩が大量に残されている。

24) なお、王元翰『王諫議全集』「文集」では、王元翰が普陀山に遊んだ際、昱光の別業に立ち寄ったところ、昱光が訴訟のために寧波府城に向かい出ており会うことができなかったことを嘆いている。

められ、普陀山での復興が急ピッチで進められていた万暦32年（1604）には昱光とともに五臺山や北京への旅をした²⁵⁾。彼は普陀山に戻ってきてから、普陀山の入り口であるこの寺院で士大夫たちと交流を深めながら、巡礼路の現状を嘆かわしく思っていた。

朗徹が交流した士大夫の中でもっとも目を引くのは、陳繼儒と董其昌という松江を代表する文人である。特に陳繼儒は普陀山と縁の深い人物であった。普陀山には万暦初年に餐霞庵という庵堂が創建されているが、この庵を作った宝峯という僧侶は実は陳繼儒の伯父にあたり、一族からの援助のみを頼りにこの地で修行の日々を送っていた²⁶⁾。この庵に掲げられていた「餐霞」の額も陳繼儒の題贈であった。董其昌についても、普陀山には彼の筆跡を刻したとされる碑刻が複数残されている。たとえば白華庵のすぐ側に刻まれた「入三摩地」の文字は彼のものとされている²⁷⁾。

この兩名の名前は今回紹介するふたつの碑刻の中には見られない。しかし、『南海普陀山志』の中には、巡礼路が完成したのちに朗徹の依頼を受けて彼らが書いたと思われる文章が残され、この巡礼路工事が始まった経緯やその過程などが記されている。それによると、普陀山は江南第一の名勝として知られてはいたが、参道だけは未整備で、険しい山道で、風雨の激しい夕暮れに、一步ごとに『行路難』を歌いながら進む僧俗の姿があった。このような人々の姿を見た朗徹は「昔釈尊は燃燈仏を前にして髪をほどいて泥道の上に敷き、それだけでは足りないので道に身を投げ出してこの燃燈仏の化身である老僧の足が汚れないようにした。いにしえの聖賢ですら体で土を負ったのである。それなのに拙僧のような一僧侶が、どうして率先して鋤を背負わないことがあるのか。」このように嘆き、今まで蓄えてきた資金を取り出し、自ら率先して作業を始めた。すると募ったわけでもないのに、噂を聞きつけた者が集まってきたのであった²⁸⁾。

このようにして天啓7年（1627）に始まった工事は、崇禎3年（1630）に終了した。このときに作られた参道は道頭の茶庵から白華庵の西まで路の広さは2丈、高低差は3丈、山門を通過して、両側に竹の生い茂った曲がりくねった小道を進むと、白衣真応殿の東にたどり着く。普陀寺に達するまでは、合計4～5里。途中には休憩を取るための茶亭、自度亭があり、道の両側には木々が生い茂り日差しを避けることができた。さらに眺望の良い高台もあれば、山田・野花を鑑賞でき、石のベンチで休むこともできるようになった。石柱には李白の詩の一節が題してあり、六道のうち人道と天道の景色を満喫することができたのであった。これによって巡礼者は広々とした平坦な道を歩むことができるようになり、これまでの泥にまみれ、滑りやすい道とは比ぶるべくもない。陳繼儒も董其昌も口をそろえて朗公の功德の大きさを讃えたのであった²⁹⁾。

以上のことからわかるように、朗徹は率先して巡礼路の修復を始め、最終的には多くの人々がこの事業に賛同した結果、長きにわたって讃えられるこの道が出来上がったのである³⁰⁾。その賛同者のリストが

25) 釋海觀『林樾集』卷上「題朗徹上座南還詩卷後」。

26) 『重修普陀山志』卷5。

27) 『南海普陀山志』卷11。

28) 『南海普陀山志』卷11、陳繼儒「普陀朗徹禪師修妙莊嚴路記」。

29) 『南海普陀山志』卷11、董其昌「普陀山修路碑記」。

30) 明末には建築ブームが巻き起こり、寺院再建のために僧侶、あるいは僧侶が文人に募疏の執筆を依頼して広く寄進

この碑刻に刻まれているということになる。

では、具体的にどのような人々が資金援助を行ったのか、2つの碑刻を具体的に見ていくことにしたい。

三・「妙莊嚴路功德碑」(1)の検討

最初に、先に立てられた碑刻(1)から見ていくことにしよう。この碑刻は崇禎4年（1631）8月、巡礼路の全工程が完了して1年余りの後に立てられた。ここに列挙されている人名は、全て僧侶である。その大半が普陀寺の僧侶で、普陀山全体に散らばる様々な庵の名前も見られる。

まずは右上から順番に見ていくと普陀寺の常住から最も多くの資金（50丈）が捻出されている。叢林全体からの援助とみてよいであろう。以下は、高額を寄付した高僧の名前が並ぶ。東方丈³¹⁾の如曜は朗徹の師である昱光の本名である³²⁾。彼は当代の高僧や文人と広く交流しその際に贈答された詩文が数多く残されている³³⁾。西方丈の寂乾については西資庵という小さな庵を建てたことを除けばほとんど履歴はわからない³⁴⁾。西退居の性海³⁵⁾は引退した高僧、その次に4名の耆宿比丘、つまり修行を積み徳望の高い老僧の名前が並ぶ。次の領袖比丘性珠とは朗徹本人のことである。同じ十丈の寄進を行った人物の中で提唱者である朗徹がいちばん最後に書かれているが、これは彼の右側に書かれている僧侶がすべて彼よりも年長、あるいは役職が上であるということを表すのであろう。領袖とはおそらくこの事業を率いたという意味でしかない。

その次に書かれる慧濟庵は普陀山の北部にそびえる菩薩頂に建てられた規模の大きな庵堂である³⁶⁾。菩薩頂は200メートル程度のものであったが、この島の中では最も高い位置にある。倭寇や明朝の軍隊は情勢を知るためにしばしばこの頂に登った。この庵は清代後半になると寺額を与えられ、慧濟禪寺という普陀山の三つ目の寺となる。庵の中でも格段の量の寄進が出されていることから、明末の段階でかなりの財力を有していたことがわかる³⁷⁾。

を募ることは多かった。しかし、朗徹はまず自分の力で道を修復し始めた。この工事についての募疏が残っていないのはこのためである。

31) 『重修普陀山志』巻2。

32) 『重修普陀山志』巻2。彼は万暦40年（1612）に普陀寺の住持となる。

33) 『南海普陀山志』巻13 袁茂英「白華庵贈昱光禪師」、張四岳「送昱光上人歸南海」、張可大「贈白華庵昱光禪師」、『憨山老人夢遊集』巻38「寄普陀昱光禪人」。

34) 屠玉衡も彼についての詩を詠んでいる。『南海普陀山志』巻13「贈補陀元初上人」。

35) 『南海普陀山志』巻4。彼は年老いて西方丈座を退き、磐陀庵という普陀寺のすぐ西の大きな庵に隠居していた。衣鉢の余資を蓄え、20年かけて1000畝の田を設け僧侶に耕作させた。普陀寺の西側には比較的平坦な土地が広がり、耕作に適していた。

36) 『重修普陀山志』巻2。

37) 『普陀洛迦山誌』によれば、辺鄙な場所にあるため、普陀山を訪れる人々が必ず訪れるような場所ではなかったが、法雨寺から菩薩頂の間の道には多くの文人の題記が記されており、少なからぬ文人墨客がこの庵を詣でたことがわかる。

総静室は普陀山の港の近くに置かれていた施設で、普陀山全体の静室を統括する役割を果たしていた³⁸⁾。普陀山の庵堂は「茶山（法雨寺を中心とする普陀山北部）」「千歩沙（普濟寺と法雨寺の中間の普陀山中部）」「磐陀石（普濟寺を中心とする普陀山南部）」の3カ所に分類され³⁹⁾、毎年僧侶を1人ずつ選び輪番で年務に当たらせていた⁴⁰⁾。万暦24年には普陀山には200あまりの僧坊静室があったが⁴¹⁾、天啓年間にはその数は500を越し⁴²⁾、崇禎年間にはさらにその数は増えていたであろう。後の康熙年間には総静室はすでに廃され、耆旧の僧3名が選ばれて港の側に建てられた道頭下院の楼上で「煙爨簿」や「香檀散静」といった様々な事務を行っていた⁴³⁾。「散静」とは参詣者が布施した金銭や食糧を各静室の僧侶に分配することで、つまり、普陀山の入り口に布施を管理する場所を設け、全体に平等に分配するようにしていたのである。

その後に普陀寺の僧が8名続く。1段目の最後の2名は、普陀寺ではなく庵堂の主である。最初の寄進者の名前は「■陽庵比丘如楽」とあるが、最初の文字は読み取れない。しかし如楽は朝陽庵の主であったことが山志に見えることから、「朝」と推定できる⁴⁴⁾。朝陽庵は普陀山の北部に位置する菩薩頂の麓にあり、万暦5年（1577）には明鳳という宦官が出家している。庵の名前はこの明鳳の号に由来する。明鳳の死後は弟子の真玄や孫弟子の如楽によって継がれた。かれらもみな宦官であった。如楽は創始者明鳳の法孫ということになる。真玄・如楽の2名も宦官であることから考えると宦官が出家するための庵として機能していた可能性が高い。詳しくは次の碑刻でも述べるが、宦官は莫大な富をこの地にもたらしたのであった。このような宦官の庵は、宦官の寄進や引退後の出家の窓口となっていたのではなかろうか⁴⁵⁾。

2段目以降は重要な部分のみかいつまんで紹介する。終南山とは陝西の終南山であろう。終南山の側には南五臺山があり観音を祀っていることで有名である。南五臺山と普陀山の間には僧侶の間の往来があった可能性は高い。次の青峯頂という地名は普陀山には存在しない。あるいは五臺山の地名であろうか。高僧の伝記の中には五臺山・普陀山、そして峨眉山での修行の経歴がしばしば書かれる。普陀山には全国からの僧侶が集まる土地であり、普陀山へ行くことは一つのステータスとも言えた。例えば鎮海

38) 『南海普陀山志』巻11。なお、この建物は万暦30年に張隨が拡張工事を行い、「白雲林總會」と題されていた。

39) 『重修普陀山志』巻2。なお茶山は俗人の来訪が少なかったためか早くから多くの庵堂が建てられた。同じ普陀山でも南部は無数の巡礼者が来訪するため、修行にはあまり適さなかったのかもしれない。

40) 『南海普陀山志』巻11。

41) 范涑『兩浙海防類考統編』巻7。

42) 釋海觀『林樾集』巻下「募化飯僧散衆題辭」。

43) 『南海普陀山志』巻11。

44) 『重修普陀山志』巻2。

45) 陳玉女『明代二十四衙門宦官與北京佛教』（如聞出版社、2001年）によれば、北京に建てられた寺院の多くは宦官にとって養老院の役割を果たしていた。年老いて宮廷の雑務をこなすことが難しくなった宦官達は、北京の寺院に隠居して余生を過ごす。北京の城内・城外に数多建てられた寺廟の多くがそのような役割を果たしていたのであった。普陀山のこの庵もあるいは似たような役目を果たしていたのではあるまいか。なお、1段目の最後には「■隱庵」とあるが、名前は特定できない。明潔は「明鳳」と「明」の字を同じくするため、同じ代の法弟子であった可能性もある。あるいは彼も宦官であったかもしれない。

禪寺を作った高僧である大智禪師は五臺山からやってきた人物であった。万暦年間に普陀山を訪れた夏樹芳は海潮寺（のちの鎮海禪寺。清代には法雨寺と名前を変える）にあった安楽堂という僧侶の病気を治療するための建物についてこのように述べる。

〔海潮寺には〕天下の名僧の往来が絶えず、病のあるものはこの堂で静養する。私がこの堂に登り戸を叩くと、そこにはわが呉越からだけではなく、湖廣や陝西、山東や山西の僧侶までいた⁴⁶⁾。

このように、普陀山には各地からの僧侶が次々と集まってきていた⁴⁷⁾。おそらくこの碑刻に書かれている外部の僧侶たちは、遊行などで普陀山を訪れ、朗徹の事業を聞くにおよんで、援助を行ったのであろう。なお、圓隱庵と林樾庵は普陀山の庵堂である⁴⁸⁾。

その次には、「禪那庵當家」とある⁴⁹⁾が、「當家」とは僧の名前ではなく庵の管理者という意味であろう。しばらく普陀寺の僧侶の名前が続き、さらに4つの庵堂の名前が書かれた後、三聖堂の名前が現れる。これは万暦30年（1602）に建てられた茅がもとになったもので、張隨と党礼の太監ふたりがここを通りかかった際に、わき水の味を賞賛して建てさせたのがこの建物である⁵⁰⁾。招宝山は寧波から鄞江を下って河口のところにある。寧波から普陀山まで船で移動する際には必ずその側を通る場所で、宝を招くという名前の通り、ここに多くの商船が寄港した。

3段目以下はすべて1丈の寄進で、普陀寺の僧侶が26人続く。4段目も基本的に普陀寺の僧侶⁵¹⁾で、後半の2人の沙弥は、出家はしたもののまだ具足戒は受けていない見習い僧である⁵²⁾。5段目は前半が普陀寺の僧侶、後半は寧波府の寺院についての記載である。この時期の普陀山には普陀寺と鎮海寺の2つの寺しかない。6段目には盤陀石静室と茶山静室の名前が並ぶ。先述の通り普陀山の庵は茶山・千歩沙・盤陀石の3カ所に分けて管理が行われていた。碑刻には千歩沙の名前はないが、これらの庵の名前が普陀寺に近い順に書かれていると仮定すると、文字が消えてしまってみえない中央の部分がそれに当たるのかもしれない。最後の7段目は摩滅が進み、右側の部分のみわずかに読み取ることができる。

以上のように、本碑刻は朗徹の事業に賛同した普陀寺の僧侶たちが、次々と彼のために資金を提供したことを表している。さらに、その中には普陀山以外の寺院からやってきた僧侶の名前も見られることから、多くの僧侶が往来していたことが確認できよう。そして、ここに書かれた僧侶たちがこれだけの寄進が行えたと言うことは、普陀山の寺院に寄進を行う在俗の人々が大変多かったことの証拠でもある。碑刻(2)を検討することで、その感を強くすることになろう。

46) 夏樹芳『氷蓮集』巻2「海潮寺安楽堂碑記」。

47) そのほかにも『寓林集』巻30「為普陀寺齋僧募縁引」にも天下の行脚僧が続々と集まっていたので、了空という普陀山の僧侶が、彼らに配布する食料を確保するために杭州で寄進を募ったことが記されている。

48) 『重修普陀山志』巻2。海観とは、林樾庵の創建者である。

49) 『南海普陀山志』巻11。禪那庵は万暦23年（1595）に天然という高僧が隠居の場所として建てたものである。

50) 『南海普陀山志』巻13。

51) その中央に一人だけ「白華庵」の名前があるが、おそらく性静のみが白華庵の僧侶で、その後ろに書かれている名前はみな普陀寺の僧侶のものであろう。

52) 彼らと5段目以降に書かれている具足戒を授かった比丘たちはともに同じ額の寄進をしているのに、彼らが上に書かれているのは不思議である。

四・妙莊巖路功德碑(2)の検討

本碑刻には在俗の人々の名前が多数刻まれるが、履歴の分かる者は少ない。直隸徽州府休寧県呉維城⁵³⁾、寧国府宣城縣信官楊賓⁵⁴⁾のようなかなりの多くの額を寄進している人物についても手がかりはつかめない。本碑刻も基本的に寄進額の順番に人名が並んでいる⁵⁵⁾が、本章では、順番通りに見てゆくのではなく、地理的分布や宦官・女性の寄進という側面に注目して、寄進の傾向について述べていくことにしたい。

1・地理的分布

ここに刻まれた人物について大変に興味深いのはその地理的な広がりである。陝西・山西・山東・福建などこの碑刻に刻まれた様々な地名から、普陀山の名声が中国全土に広まっていたことを述べることもできようが、実際に分析してみるとそう単純でもない。まずは寄進者の出身地の一覧表を示そう。

| 省 | 府 | 件数 | 寄進量(丈) | 省 | 府 | 件数 | 寄進量(丈) |
|-----|------|----|--------|-----|-----|----|--------|
| 浙江省 | 寧波府 | 32 | 77 | 南直隸 | 徽州府 | 24 | 61.5 |
| | 杭州府 | 22 | 22 | | 寧国府 | 8 | 45 |
| | 紹興府 | 15 | 25.5 | | 應天府 | 4 | 16 |
| | 嘉興府 | 9 | 14 | | 松江府 | 2 | 4 |
| | 平湖 | 6 | 6 | | 蘇州府 | 1 | 3 |
| | 湖州府 | 3 | 3 | | 揚州府 | 1 | 2 |
| | (参将) | 2 | 3 | | | | |
| | 定海 | 1 | 1 | | | | |
| 小計 | | 90 | 151.5 | 小計 | | 40 | 131.5 |
| 省 | 府 | 件数 | 寄進量(丈) | 省 | 府 | 件数 | 寄進量(丈) |
| 北直隸 | 順天府 | 12 | 17 | 河南省 | | 2 | 3 |
| | 保定府 | 1 | 3 | 山西省 | | 2 | 2 |
| | 河間府 | 1 | 1 | 山東省 | | 1 | 3 |
| | | | | 江西省 | | 1 | 2 |
| | | | | 福建省 | | 1 | 2 |
| 小計 | | 14 | 21 | 陝西省 | | 1 | 1 |
| | 宦官 | 件数 | 寄進量(丈) | | 宦官 | 件数 | 寄進量(丈) |
| | 北京 | 10 | 104 | | 南京 | 8 | 17 |

53) 陳智超著『美國哈佛大學哈佛燕京圖書館藏明代徽州方氏親友手札七百通考釋』(金冊31「呉維城」, p. 543.)に載せられている手紙には彼と思われる名前がある。『崇禎實録』などの野史にも同名の人物があらわれるが、同一人物であるかどうかは不明。科挙に及第した記録はない。

54) 名前の下に割り注のように「恭人鮑氏」と書かれるが、恭人は四品官の妻に与えられる称号である。楊賓は知府クラスの人物であった。

55) なお、『天目中峰広録』では比丘や宰官、善男子などと分類してから、その分類の中で寄進額の順に並べている。このような並びは碑刻にもよく見られるが本碑刻ではあくまでも寄進額を基準にしている。なお、4段目だけ例外で4人だけ1丈5尺という中途半端な額を寄進している。

北京や南京の宦官は別として、「寧官等…」と題名にあるように寧波府からの寄進が群を抜いて多いことは一目瞭然であろう。万暦年間における復興事業の中心となったのは、寧波府の人々であり、『重修普陀山志』の「芸文志」にはその大半が浙江省とくに鄞県の官僚や生員、つまり士大夫層のものが載せられていた⁵⁶⁾。この碑刻を見る限り、寄進者の大半も寧波からの人々である。普陀山の岩にある題字の大半は寧波周辺の士大夫によって書かれたものであることから考えても、明末において寧波から普陀山へは極めて頻繁な往来があったと見て良い⁵⁷⁾。これは地理的に考えても自然なことである。

しかし、興味深いのは寧波府の次に多くの寄進が寄せられているのが、杭州でもなく蘇州でもなく徽州府からということである。確かに徽州から普陀山まではさほど遠くない。錢塘江を屯溪から下って行けば、杭州までは600里あまり、早ければ10日ほどでたどり着く⁵⁸⁾。そこから紹興、寧波を経て普陀山へはすぐである。徽州商人は海外貿易や木材の交易で江南を行き来しており、美術品の交易も行っていたのは周知の事実である。新たに参入する徽州商人のために書かれた路程書にも普陀山渡航についての情報が記されている⁵⁹⁾ことや、普陀山に「新安堂」という庵堂があったことなどから考えても⁶⁰⁾、普陀山との関わりが深い地域であったことは間違いない。当時の文献にも徽州からの参詣を題材とした逸話には事欠かない。たとえば、『普陀洛迦新志』は釈戒頭の『現果隨録』を引いて、明末の崑山に住む汪某という徽州出身の男の逸話を伝える。彼は3年の持齋ののち、普陀山参詣のために港で船に乗ろうとしていると、近所の者から家が燃えているからすぐに帰れ、と知らせが来る。しかし彼は、3年間の潔斎をしたのだから、それに比べれば大したことではないと言って、そのまま船に乗って普陀山に向かってしまった。さて、巡礼を終えて帰ってきたところ、近所の家は全て焼け落ちていた。しかしながら、不思議なことに彼の家だけは、全く被害を受けていなかったという⁶¹⁾。

そしてもう一つ興味深いのは、寄進が徽州・寧国・杭州・嘉興・紹興・寧波という現在の行政区画で言えば安徽省東南部と浙江省北部に集中していることである。寧波と徽州の間の直線距離は、蘇州府よりもさらに北の常州府までの距離と大差ない。しかしながら、本碑刻において蘇州・松江からの人々の名前は僅か3件にとどまる。長江下流域では普陀山の僧侶が頻繁に行脚して寄進を集めて回っていた⁶²⁾。ある者は江陰あたりまで出向き、僧侶たちに与えるための米を得るため、自らの指を焼いて自らの信仰の強さを示した⁶³⁾。松江からも数多くの民衆が、寧波を経由せず直接船を出していた⁶⁴⁾。そういった事実があったことを念頭に置けば、この地域からの人々の少なさは不自然なのではなかろうか。

56) 『重修普陀山志』巻5、巻6。

57) 『普陀洛迦山誌』pp. 599-612。

58) 『一統路程図記』巻7「江南水路」。

59) 『一統路程図記』巻7、路程書については谷井俊仁「路程書の時代」（小野和子編『明末清初の社会と文化』、1996年）を参照。

60) 『南海普陀山志』によれば、休寧県出身の性祖という人物が開いたもの。性祖はもともと程氏の出身で三人の子供達が若死にしたので、世俗を離れ普陀山の無窮禪師のもとを尋ねて出家したのであった。

61) 『普陀洛迦新志』巻3。

62) 例えば『林樾集』には普陀山の高僧がたびたび江南各地に寄進に行くことが記されている。

63) 夏樹芳『水蓮集』巻1「南海僧然指募縁記」。

64) 拙稿「明代万暦年間における普陀山の復興」（『東洋史研究』64-1、2005年）。

そして、もう一つの偏りとして気になるのは、順天府からの寄進の多さと、それ以外の華北諸地域からの寄進が極めて少ないことである。順天府からの多さは、宮廷における普陀山信仰の影響や、あるいは普陀山の僧侶が再三にわたって京師に陳情に訪れていたことなどを考慮に入れることもできよう。しかし、明末の山東・華北といった地域からは数多くの民衆が参詣に訪れていた⁶⁵⁾。にもかかわらず、この碑刻にはほとんどその名前を見ることがない。むしろ距離としては遠い直隸からの方がその数は多いのである。さらには広東や福建といった地域からは多くの日用品が寄進されていたはず⁶⁶⁾なのに、この碑刻には福建からの寄進がわずか1件見られるだけである。いったいこれらの事実をどのようにして説明したらよいのであろうか。

これは、この丈という単位がある程度のまとまった金額を示していることと関連があるのではなかろうか。とくに遠方からやってきた人々の場合、個人で長旅をすることができるような人物は限られる。多くの民衆は香会・香社と呼ばれる一種の講のような団体を作ってやってきていた⁶⁷⁾。朗徹がこのような事業を行っていることは事前には伝わっていなかったであろうから、彼らはその分の資金を準備して旅立ったとは思われない。そうすると手元にさほど多額の金は残っていなかったであろうから、この碑刻に名前を載せるほどの額は準備できなかったはずである。この碑刻に名前が載っているのは、数両単位の銀をすぐさま寄進できるほどの経済力を有した人々だけなのである。つまりこのことは浙江省北部から徽州にかけての富裕層が、普陀山の繁栄を下支えしていたことを示してもいよう。

我々が遊記などから知る福建や蘇州・松江方面からの巡礼はどうやら基本的に民衆が中心で、士大夫が頻繁に行き来する範囲はこの碑刻に見られるように寧波を中心とする地域に止まっていたようである。民衆は松江から荒波を越えて普陀山へ巡礼に行き、普陀山の僧侶も外洋を越えて喜捨を求めて走り回った。しかしながら、士大夫たちがそのような危険に身をさらすことは少なかったのだろう。荒波を越えるには何よりも宗教的な情熱が必要だったのである。多くの士大夫はまずは寧波まで行くことで、危険な船旅の時間を少しでも短くしようとしたに違いない。

しかし、資金に乏しい民衆も普陀山にある程度の寄進をしていたはずである。それを間接的に示しているのが碑刻(1)なのではなかろうか。常に多くの人々が訪れる普陀山では、巡礼者の財力に応じていくばくかの金銭あるいは食料などが寄進された。それを一度集めて分配するのが碑刻(1)に出てきた総静室であった。それが全島の僧侶たちに公平に分配されることによって、僧侶たちにある程度の蓄えが生まれ、それを朗徹の事業につき込むことになったのであろう。碑刻(1)には僧侶たちの名前だけが刻まれているが、その背景には名も無き民衆のけなげな寄進の積み重ねがあったのである。

2・宦官の寄進

さて、本碑刻で注目されるのは、北京と南京の宦官たちから多くの寄進が集まっていることである。特に一人一人の寄進の額が大きいことが特徴である。碑刻の筆頭に書かれている「欽差御馬監太監」の

65) 拙稿『華北からの普陀山参詣』（富士ゼロックス小林節太郎記念基金研究助成論文，2007年）。

66) 朱国禎『湧幢小品』巻26「普陀」。

67) 拙稿『華北からの普陀山参詣』（富士ゼロックス小林節太郎記念基金研究助成論文，2007年）。

寄進額は、この碑刻全体の一割近くを占めている。破損が激しく個人名を特定できない⁶⁸⁾が、この宦官が最大の施主であり、おそらくは朝廷においてかなりの権力を有していたのであろう。

また1段目に「蘇若■」という名前が見えるが、おそらくは「蘇若霖」であろう。彼は崇禎年間に魏忠賢が失脚すると、資金と鍍金の観音像を持って普陀山へやってきたことが山志に記されているからである⁶⁹⁾。なお『酌中志』には、崇禎年間に南京に送られ、浄軍、つまり宦官で構成される軍隊に編入されてしまったとある⁷⁰⁾。孫昇・趙秉忠・趙進■・翟沐壽・胡承幹については具体的なことは何も分からないが、いずれも寄進量は十丈と多い。普陀山の復興に際して宦官の果たした役割が大きかったことはすでに述べたが、この時期においても宦官の懐から出された資金が大きな割合を占めていることが分かる。

普陀山の僧侶と士大夫たちが積極的な交流を行っている⁷¹⁾にもかかわらず、本碑刻には蘇州・松江の文人の名前がかくも少ないのは、あるいはこの宦官達と関わりがあるのかもしれない。天啓年間と言えば、もちろん魏忠賢を中心とする閹党が跋扈していた時期である。蘇州の士大夫たちは彼らに対して激しく反発した結果、開読の変が起こったのは、天啓6年（1626）3月のことであり、天啓帝が逝去したのが、ちょうどこの工事が始まった年である天啓7年（1627）8月のことであった。魏忠賢はその後ろ盾を失い、まもなく命を落とすことになる。この事業が行われたのは、かように微妙な問題をはらんだ時期であった。このように蘇州が混乱し、宦官への反発も頂点に達しようとしているときに、普陀山へ旅するどころではなかったのかもしれないし、仮に普陀山を訪れ、朗徹の姿を見ていくばくかの援助を行ったとしても、自らの名を宦官たちとともに刻まれることは良しとしなかったのではなかろうか。

3・女性の寄進

最後に寄進者の中に見える女性について簡単に説明したい。本碑刻には多くの女性の名前が記される。信女として単独で書かれている場合もあれば、夫や息子の名前の下に割り注の形式で「同室某氏」「同母某氏」「某門某氏」などと連名で書かれている場合もある。男女比を見れば圧倒的に男性が多く、女性は尼を含めたとしても2割にも満たない。

しかし、ある程度の財力を持った家で女性が単独で巡礼することが本当に許されたのであろうか。本碑刻では女性が男性の名前に附属する形で書かれていることが多いが、それは彼女たちが往々にして夫や息子といった身内の男性の同伴のもと普陀山にやってきたことを示している。では、信女として単独で書かれている場合はどうだろうか。同じ地域からやってきた人々の名前が近くに書かれていることがあるが、単独で書かれている信女の周囲に同姓の人物はほとんど見あたらない。あるいは彼女たちは寡婦かもしれないが、太倉州から普陀山へ巡礼に出た母親が難に遭った夢を見た息子が必死で祈りを捧げたという記録もある。親子や夫婦で普陀山に向かっていたのならこのような記録は作られないであろう

68) この時期の政治状況を考えれば、これだけの財力を有する宦官は魏忠賢と何らかの繋がりがあったのは間違いない。あるいはそれが原因で名前を削られてしまったのであろうか。

69) 『南海普陀山志』巻10「事略」。

70) 劉若愚『酌中志』巻15。

71) 釋海觀『林樾集』巻上「無住偈」には朗徹が乞食をするために蘇州を訪れた際に多くの士大夫と交流を深めていたことが記されている。

から、実際には単独での行動も許されていたと考えて良いのだろう⁷²⁾。

なお1行目の7人目の「徽州府歙県信女黄源等」は例外的に女性の名前が書かれている。「等」ということは複数の女性による寄進か、あるいは『醒世姻縁伝』に出てくるような女性を中心とする香会によるものであろうか⁷³⁾。

おわりに

以上、2つの碑刻を検討してきた。普陀山は権威を背景にしながらも、宮廷の宦官や寧波を中心とする多くの士大夫たちと親しく交際することで、資金を手に入れ、叢林を栄えさせていった。この巡礼路の完成によって、普陀山への巡礼者は大きな恩恵を受けたに違いない。荒波を越える船旅に比べれば、ぬかるんだ山道を数キロ歩くことなど大したことではなかったはずだが、この美しい道を通る人々は、朗徹の事跡を偲び、その事業を援助した人々に思いをはせ、自らも進んで普陀山の僧侶たちに気前よく寄進をするようになったかもしれない。僧侶たちが得た富を、寺院の修復、巡礼路の整備などに投資していくことによって、普陀山は、巡礼者、あるいは修行に訪れる僧侶たちにとってより魅力的な聖地として発展を続けた。ただし、清朝の入関以降、この地も混乱が続き、建築も芸術品も灰燼に帰した。普陀山は康熙年間に再び国家の全面的なバックアップを受けて復興を行わざるを得なくなる。

さて、最後にこの碑刻の性格について一言加えて本稿を終えることにしたい。通常の碑刻であれば、文章が碑陽に刻まれ、それに関係する人名が碑陽の脇や碑陰に刻されるものである。しかしながら、この碑刻はそうではない。寺院に寄進される梵鐘などと同じように、寄進者の名前だけがこのようにして残されている。実は筆者は、山志に収録される董其昌の文章の題名が「普陀山修路碑記」であったことから、この2つの碑刻は陳繼儒と董其昌の文章を刻んだ碑刻の碑陰で、碑陽が完全に摩滅してしまい、辛うじて碑陰だけが残ったのではないかと当初考えていた。

しかしながら、よく考えてみればその可能性は極めて低い。普陀山の入り口に朗徹という一僧侶を顕彰した文章を堂々と置くであろうか。おそらく、朗徹はそのようなことはしなかったに違いない。陳繼儒は朗徹の言葉を紹介している。

吾が師である昱光老比丘は、自らの血で写経を行い、朝廷に上疏し、本寺を勅建せられんことを請われました。その際に神宗は帑金や御製の碑文、金欄の紫袈裟などを賜ろうといたしました。吾が師はことごとく受けませんでした。私が石を積み土を掘り返した事など、大したことではございません⁷⁴⁾。

72) 銭世揚「畸人伝」(『明代自伝文鈔』pp. 349-352)。また、唐時升は孫履素という人物の母が70歳になったことを記念して、その半生を讃え、そのひとつとして彼女が普陀山に巡礼したとき、船がひどい嵐に見舞われたが、彼女は泰然自若としており、周囲の人々がみな驚いたことを記す(唐時升『三易集』巻20「新安孫母七十寿序」)。また、談遷『棗林雜俎』和集「叢賢」にも天啓年間に太倉の王氏という女性が普陀山に巡礼した際に、鳥の手前で船が転覆して命を落としてしまったことが書かれる。単独での巡礼は決して珍しいことではなかったようだ。

73) 『醒世姻縁伝』巻69。

74) 『南海普陀山志』巻11、陳繼儒「普陀朗徹禪師修妙莊嚴路記」。

普陀山がかくも発展したのは、まさしく彼の先人たちの功績であった。倭寇との戦闘の中で荒廃しても、官憲から渡航を禁止されても、身の危険を冒して普陀山を復興しようとした人々は、彼の周囲でまだ修行を続けていたはずである。そういった人々を讃える碑刻すら立てられていなかったにもかかわらず、自らのような一僧侶を顕彰することは決してない。ましてやこの碑刻はおそらくは信徒たちの寄進の一部を使って立てられたに違いない⁷⁵⁾。彼にとって讃えられるべきなのは自分ではなく、自分のささやかな行為にかくも大きな援助を与えてくれた人々であった。彼の初志はあくまでも泥濘のない参道を作り上げることであったが、気づけば出来上がったのは美しい蓮華の模様まで彫られた石畳が続く道であった。この2つの碑刻は彼らへの感謝と、今後の変わらぬ支持を願い、後に普陀山にやってきた人々にも同様の援助を惜しまれぬよう訴えかけるものだったのではなかろうか。

【附記】本稿は京都大学人文科学研究所における「東アジア地域間交渉の文書と言語」共同研究班で行った口頭報告をもとにしている。席上で貴重な御意見を賜った諸先生方に心より感謝申し上げたい。

75) 李樂『見聞雜記』卷11（『北京図書館古籍珍本叢刊』第66冊所収）には万曆40年（1612）に浙江省桐郷県のとある寺院で鐘樓が建てられた際に、鐘樓におよそ80両、鐘に300両以上の出費があっただけでなく、碑を立てるために10両が支出されたことを記している。また『北京東嶽廟與北京泰山信仰碑刻輯録』p. 294には清末の例ではあるが石碑のために80両の支出があったことが記される。

